おじいちゃんが教えてくれた事

二見中学校一年　濱田　如那

私のおじいちゃんは、杖をついて歩いてま

す。小さい時は何も思いませんでしたが、小

学生の時に、なんで喋るのがゆっくりなんだ

ろう。なんで杖をついてるのだろうと思い、

お母さんに聞いてみると、私が1歳半ぐらい

の時に、自宅で倒れたそうです。脳梗塞だっ

たそうです。脳梗塞で倒れると、手術が成功

しても手足に麻痺が残ったり、喋りづらくな

る言語障害になるなどの後遺症が残るそうで

す。それまで普通に歩いたり、家族と話した

りしていたおじいちゃんが、病気によって手

足が不自由になり、当たり前だと思っていた

「自分の力で歩くこと」や「自由に手を動か

すこと」が、決して当たり前ではないのだと

知りました。おじいちゃんの家に行くと、時

々、お母さんが物をとってあげたり、つまず

かないように座布団をのけたり、段差で手を

添えたりと小さな事だけど手伝ってる事があ

20 × 20

りました。

しかし、「手伝うこと」と「相手の気持ちを考えること」は同じではないかと思いました。おじいちゃんにも自分でやりたいことや、自分でできることがあると思います。

私達が「危ないから」と何でも先にやってしまうと、おじいちゃんの「自分でやりたい」という気持ちを奪っているかもしれません。麻痺があっても、自分でできる事はあるのだと感じました。

おじいちゃんが困っているときにすぐ手を出すのではなく、まず「手伝おうか」と声をかけることを大切にするようにしました。そして、おじいちゃんが自分でできることは、できるだけ自分でできるように見守るようにしました。

この経験から、私は人権とは、特別な人だけが持っているものではなく、誰もが生まれながらに持っている「その人らしく大切にされる権利」なのだと思いました。障害や病気

があるからといって、その人の気持ちや考えが軽く扱われていいわけではありません。また、街の中でも、車いすを使っている人や体が不自由な人を見かけたときに、「かわいそうな人」と決めつけるのではなく、「何か困っていることはないかな」と考えることが大切だと思います。必要なときには声をかけ、相手が自分でできることは尊重する。それが本当の意味で相手を大切にすることなのではないかと思いました。

障害や病気のある人だけでなく、年齢や性格、考え方などが自分と違う人に対しても、「自分とは違うから」と距離を置くのではなく、その人の立場になって考えられる人になりたいと思います。

今回、人権について考えたことで、私は人権は遠いところにある特別な問題ではなく、自分の身近な生活の中にあるものだと気づきました。友達の話を聞くこと、相手の気持ちを考えること、困っている人に声をかけること

となど、私にもできることはたくさんあると思います。ただ、声をかけて不快に思われないかと、不安や心配になったりもします。でも、私が声をかけた事でその人の少しでも役に立てるのであれば、困っている時に自然に手を差し伸べられる人になりたいです。

おじいちゃんのことをきっかけに学んだことを、これからの学校生活や毎日の生活の中でも生かしていきたいです。一人一人の違いを認め、お互いを大切にできるようになればみんなが安心して過ごせる社会に近づいていくと思います。私もその一人として、できることから少しずつ行動していきたいです。

20 × 20